

モンテッソーリ園における音楽活動の現状と保育者の音楽指導観

—質問紙調査の分析をもとに—

藤 尾 かの子

(エリザベト音楽大学)

Musical Activity and Teachers' Perspectives of Music Teaching in Montessori Kindergartens: A Questionnaire Survey

Kanoko FUJIO

Abstract

The current study sought to clarify musical activities and teachers' perspectives of music teaching using a questionnaire-based survey for directors and teachers in nine Montessori kindergartens in Hiroshima prefecture. Although the basic form of the Montessori method involves the care of children of different ages with individual guidance, approximately 90% of all nursery teachers were found to teach children of the same age in group musical instruction. This situation is likely to have occurred because many kindergartens are involved in instrumental ensembles and singing among children of the same age. The following three characteristics were identified as tendencies in teachers' perspectives of music teaching: 1) until musical activities were performed by the group, the teacher conducted guidance according to the interest and developmental stage of each child; 2) the teacher intended to help the child clearly grasp the musical instrument rendition style using the Montessori teaching method called "presentation"; and 3) teachers placed importance on children listening to sound in a natural way. In each Montessori kindergarten surveyed, elements of the Montessori method were clearly distributed throughout the musical activities, apart from the musical activities devised by Montessori and colleagues.

1 研究の背景と目的

1907年に「子どもの家」(Casa dei Bambini)が開設した当初から、モンテッソーリ(Montessori, Maria 1870-1952)は協力者であるマッケローニ(Maccheroni, Anna Maria 1876-1965)及びバーネット(Barnett, Elise Braun 1904-1994)と共に、幼児・児童を対象とした音楽の体系的なカリキュラムの構築を目指していた。現在では、彼女らの音楽教育の系譜を継ぐモンテッソーリ教師養成コースのトレーナーらが中心となり、欧米で音楽教育のコースを開催し、保育者らの指導にあたっている¹。

上記のように、モンテッソーリ教育には独自の音楽教育が存在し、諸外国のモンテッソーリ教育実施園(以下、モンテッソーリ園)ではこれらが実践されてきている。その一方で、わが国では、それとは異なる様相を呈している。わが国のモンテッソーリ園では、数多くあるモンテッソーリ教具の中で、とりわけ音楽にかかわる教具が保育環境に設置されていないという傾向が見られる²。また、音楽活動の実施に関しても、各々の園の裁量に任せられているため、モンテッソーリ・メソッド以外の音楽教育法が導入されている場合もある。

国際モンテッソーリ協会(Association Montessori Internationale)は、モンテッソーリ・メソッドの独自性と教育の質を妥当な水準に保つために、モンテッソーリ教師養成コースを開催し、ディプロマを発行する

制度を導入してきた。わが国のモンテッソーリ教育の現場においても、この教師養成制度は踏襲されており、多くの保育者がモンテッソーリ教師のディプロマを取得し、保育に携わっている。このディプロマを取得することで、モンテッソーリ園の保育者は、モンテッソーリの教育理念に基づいて子どもを支援することや、モンテッソーリ教具の扱い方を子どもに教えることが可能となる。このようなことから、各々のモンテッソーリ園で音楽活動の内容や方法が異なっていようとも、保育者の音楽指導観の根底には、ある程度共通したモンテッソーリの教育理念が据えられており、それが実際の音楽指導に反映されていると予測できる。保育者の音楽指導観は、実際の音楽指導に大きく影響する事項である。このことを明らかにすることは、今後のモンテッソーリ園における音楽指導の在り方を再考するためのいとぐちとなると考える。

以上を前提として、本研究では、広島県内のモンテッソーリ園における保育者を対象とした質問紙調査を通して、音楽活動の実施状況と、保育者の音楽指導観を明らかにすることを目的とする。

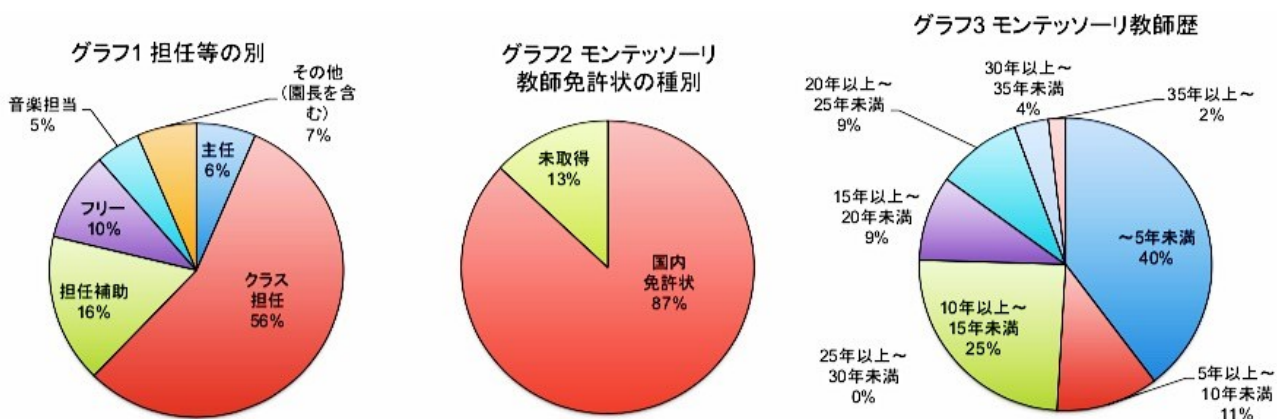
2 方法

本研究の方法は、以下のとおりである。

- ・調査対象者：広島県内の9つのモンテッソーリ園に勤める園長及び保育者61名
- ・調査時期：2018年3月27日（火）～2018年5月15日（火）
- ・調査内容：①回答者の属性に関すること、②音楽活動の実践内容（a. モンテッソーリ教育における音楽的活動の実践の有無と程度、b. モンテッソーリ教育における音楽的活動を除くその他の音楽活動の有無と程度）、③保育者の音楽指導に対する意識、という3項目を設け、36の設問から成る。
- ・質問紙の形式：①及び②は選択肢であり、③は自由記述である。
- ・分析方法：①及び②は量的に把握する。③は意味ごとに文章を切片化し、KJ法を参考にして分析を行う。

本調査を実施するにあたり、本研究者が各園の園長に対して、質問紙調査の趣旨及び倫理的配慮について説明した上で、調査協力の承諾を得た。その後、各園の園長には、保育者らに質問紙について説明してもらい、調査を実施してもらった。

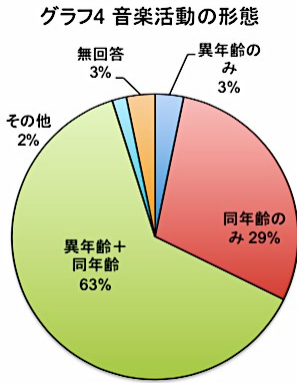
本研究では、調査内容の中から、①回答者の属性に関すること、②-b. モンテッソーリ教育における音楽的活動を除くその他の音楽活動の有無と程度、及び③保育者の音楽指導に対する意識を部分的に取り扱う。①回答者の属性については、以下のグラフ1から3に示すとおりである。まず、担任等の別については、全体の約6割弱がクラス担任であった。また、数は少ないものの、園によっては音楽専門の保育者を配置していた（グラフ1を参照）。モンテッソーリ教師免許状の種別については、全体の約9割の保育者が国内のモンテッソーリ教師免許状を取得していることから、モンテッソーリ教育に対する専門性を有している保育者の割合は高いと言える（グラフ2を参照）。モンテッソーリ教師歴については、5年未満の保育者が全体の4割を占め、10年以上の保育者が全体の約5割を占めていることから、若手とベテランの保育者の割合はほぼ同等であった（グラフ3を参照）。



3 結果

(1) 音楽活動の実施状況

先述したように、モンテッソーリ・メソッドには、モンテッソーリらが考案した音楽活動が導入されているが、わが国のモンテッソーリ園では、必ずしもそれらが実践されているとは限らない状況である。そこで、本研究では、モンテッソーリらの考案した音楽的活動を除く、その他の音楽活動の有無と程度を取り扱うことで、モンテッソーリ園における音楽活動の実際について明らかにする。

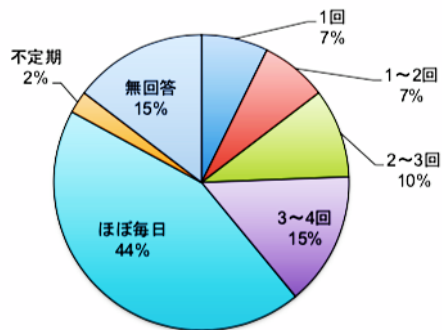


モンテッソーリ園における音楽活動の実際について明らかにするにあたり、モンテッソーリ・メソッドでは、教育方法の特徴の1つとして異年齢保育を打ち出していること、また、調査対象の全ての園が異年齢保育を基本としていることを考慮して、音楽活動の形態についての設問には、①異年齢のみ、②同年齢のみ、③異年齢及び同年齢、④その他、という4つの選択肢を設け、回答を集計した。その結果が、グラフ4に示すとおりである。しかしながら、異年齢に限定して音楽活動を実施している保育者は、全体の3%と非常に低い数値であった。一方、全体の約6割を占めたのが、異年齢及び同年齢であり、同年齢のみで音楽活動を実施している保育者は、全体の約3割であった。このことから、約9割の保育者が、同年齢での音楽活動を実施していることが明らかになった。

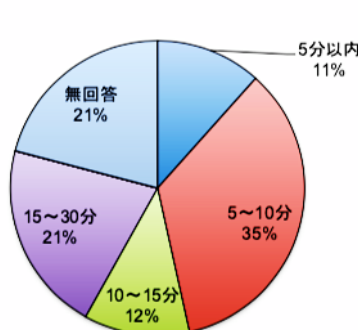
次に、異年齢と同年齢の各々における音楽活動の実施状況について見ていく。以下のグラフ5から7は異年齢の音楽活動の詳細であり、グラフ8から10は同年齢の音楽活動の詳細を示している。

異年齢の音楽活動の詳細

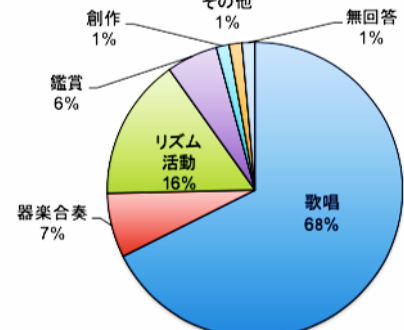
グラフ5 1週間における音楽活動の回数



グラフ6 1回における音楽活動の時間

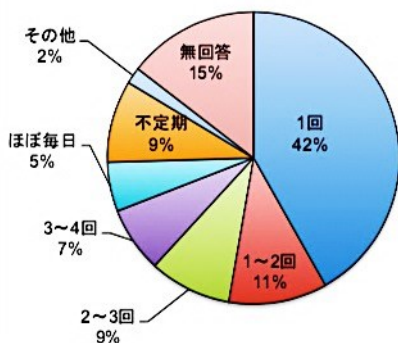


グラフ7 音楽活動の種別

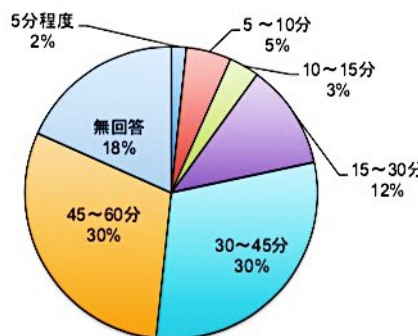


同年齢の音楽活動の詳細

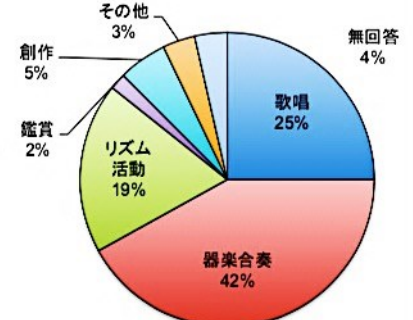
グラフ8 1週間における音楽活動の回数



グラフ9 1回における音楽活動の時間



グラフ10 音楽活動の種別



1週間における音楽活動の回数は、異年齢の約6割が3回以上という結果であった。一方、同項目において、同年齢の約5割が1回もしくは2回であった（グラフ5及び8を参照）。1回における音楽活動の時間は、異年齢の約8割が30分未満であるのに対し、同年齢の6割が30分以上であった。このことから、同年齢の1回における音楽活動は、ある程度長い時間が設けられていることが分かる（グラフ6及び9を参照）。音楽活動の種別について、異年齢で最も多かったものが全体の約7割を占めている歌唱であり、1回にかける時間については全体の約5割が10分以内であった。先述したように、モンテッソーリ園では異年齢保育を基本としているため、クラス内での集まりの時間等に歌っていることがこの結果に結び付いたものと予測できる。一方、同項目において、同年齢の音楽活動の種別として最も多かったものが、全体の約4割を占める器楽合奏であった。反対に、異年齢での器楽合奏は全体の7%と低い数値であった（グラフ7及び10を参照）。

(2) 保育者の音楽指導観

保育者の音楽指導観を調査するために、本研究における質問紙では、「音楽指導において、モンテッソーリ教育の考え方や方法を取り入れている点」という問いを設け、自由記述で回答を求めた。本研究では、分析を通して得られた結果の妥当性を確認するために、本研究で行った分析の過程を以下に示すものとする。

上記の質問に対する回答者数は、61人中、28人であった。音楽指導をする際の、モンテッソーリ教育の考え方や方法に関する記述は70であった。この70の記述を、KJ法を参考にして分類を行なったところ、第1段階として、以下の12の1次カテゴリーに分類できた。

提示 (19), 自己選択 (9), 段階的な指導 (9), 個々の子どものニーズ (8), 孤立化 (5), 自主性の尊重 (3), 繰り返し (3), 身体性 (3), 自己訂正 (2), 音楽文化の体験 (3), 音を「聴く」(5), 全ての音楽活動にモンテッソーリ教育の考え方や方法を導入している (1)

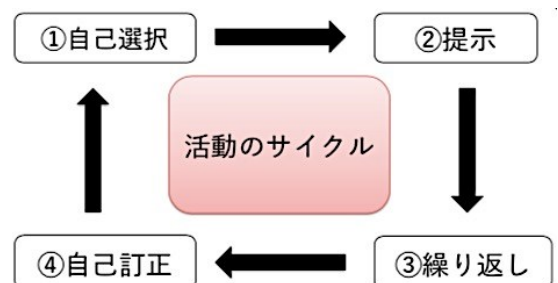
さらに第2段階として、この12の1次カテゴリーは、以下の3つの形態の2次カテゴリーに分類された。ここでは、最終的に生成された3つの形態を示し、さらにそれらの形態を包括する言葉の意味について考察した。

形態1：活動のサイクル

提示 (19), 自己選択 (9), 段階的な指導 (9), 個々の子どものニーズ (8), 孤立化 (5), 自主性の尊重 (3), 繰り返し (3), 身体性 (3), 自己訂正 (2), 全ての音楽活動にモンテッソーリ教育の考え方や方法を導入している (1)

結果

この形態には、「活動のサイクル」と呼ばれる、モンテッソーリ・メソッドにおける子どもの活動のプロセスと、それを支えるモンテッソーリの教育理念について記述されていた。「活動のサイクル」については、①自己選択（演奏したい楽器を自分で選ぶ。／子どもの興味・関心を重視する。／選択する時間を確保する。）→②提示（保育者は楽器の使い方を見せたり、音色を聴かせたりする。／言葉で教えるのではなく、視覚と聴覚から学ばせる。／楽器の奏法を分析し、分かりやすいように独立的に示す。）→③繰り返す（興味が続く限り活動を繰り返す。）→④自己訂正（自分で間違いに気づき、修正する。）という4つの過程が含まれていた。



そして、この4つの過程を含む「活動のサイクル」の根底に据えられているモンテッソーリの教育理念としては、①個々の子どもの興味・関心や発達段階等、それぞれのニーズに合わせて指導すること、②易しいものから複雑なものへと段階的に指導すること、という2点について記述されていた。

考察

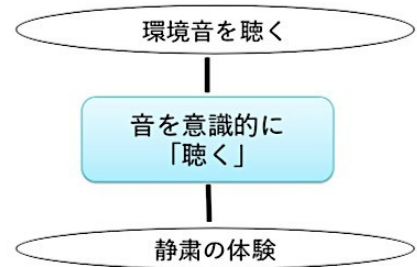
モンテッソーリ教具を用いた活動ではない楽器演奏や歌唱においても、教師は「提示（提供）」と呼ばれる方法を用いていた。この「提示」について、ある保育者の記述には、「セガンの3段階」と呼ばれる、感覚で捉えた物に名称を与えて、言葉に置き換えていくという方法を用いているというエピソードが含まれていた。音楽指導において「セガンの3段階」を用いることで、子どもは楽器や奏法に名称を一致させて記憶するため、楽器の扱い方や演奏の過程を混乱せずに理解し、体得することが可能となる。

形態2：意識的に音を「聴く」

音を「聴く」(5)

結果

この形態には、子どもが音を意識的に「聴く」ことを重視するという内容が記述されていた。具体的なエピソードとしては、外遊びで音を楽しむ、人の声、飛行機の音、他のクラスで歌っている歌声等、保育環境に介在する音を意識的に聴くことを行うという記述が見られた。それに対して、音があることに対して音のしない「静粛」を体験することを重視しているという記述も見られた。



考察

モンテッソーリ・メソッドには、子どもの個人活動として、「雑音筒」や「音感ベル」と呼ばれるモンテッソーリ教具を用いながら、音質・音量・音高を聴き分けるという活動や、クラス全員で静けさを体験する「静粛の練習」と呼ばれる活動が含まれている。このことから、子どもは日常の保育の中で、音を意識的に聴くことを繰り返し経験していると言える。

「静粛の練習」では、音を集中して聴く姿勢や、自分の身体の動きを調節することが目指されている。このようなことから、この活動は、子どもが合奏をする際に周りの音を集中して聴きながらそれに自分の音を合わせる、あるいは楽器演奏における基礎的な構えや演奏時における動きの調節等にも寄与すると思われる。

形態3：文化としての音楽体験

音楽文化の体験(3)

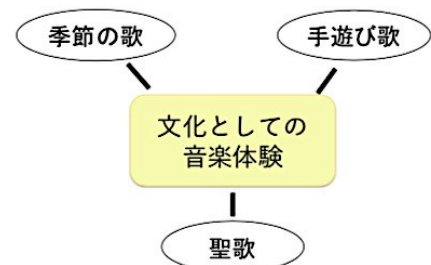
結果

この形態には、聖歌、季節の歌、手遊び歌等、歌唱活動について記述されていた。

考察

異年齢の音楽活動において、歌唱活動の占める割合が全体の約7割であることから分かるように、モンテッソーリ園においても、歌うことは日常の保育において重視されている。

モンテッソーリ教育を構成する5つの分野の1つに「文化」があるが、この分野では、自国のみならず世界の文化について多角的に学ぶことが目指される。このようなことから、歌唱が日本や諸外国の文化を理解していくための一助になっていると予測できる。



4 総合考察

ここまでの内容を総括すると、モンテッソーリ園における音楽活動の実施状況の傾向として、次のことが明らかとなった。

モンテッソーリ・メソッドの基本的な活動形態は、異年齢保育かつ子どもの個人活動であるのに対し、

全体の約9割の保育者は、同年齢の集団的な形態で音楽指導をしているということである。その要因として考えられるのは、発表会等において、同年齢での器楽合奏や歌唱を実施している園が多いという点である。また、同年齢で協同的に行う合奏や歌唱等の音楽活動を実施するためには、取り扱う楽曲の難易度や、楽器の取り入れ方を各年齢の発達段階に沿って設定する必要があるという点も、この結果に結び付いたものと思われる。

次に、保育者の音楽指導観における傾向性としては、以下の3点が明らかとなった。

1 点目は、集団で行う音楽活動に至るまでは、個々の子どもの興味・関心や発達段階に合わせた指導に主眼が置かれていることである。このことは、日常の保育の中で行う、モンテッソーリ教具を用いる子どもの自主的な活動において、保育者が各々の子どものペースに合わせて個人指導するという方法が基盤となっていると考えられる。このように、個別の対応から集団指導へと徐々に移行するという保育者の配慮は、子どもが、集団的な音楽活動と、モンテッソーリ・メソッドにおける教具を用いた自己活動との間に隔たりを感じないためにも有用であると言える。

2 点目は、モンテッソーリ・メソッドの特徴的な指導法である「提示」を用いることで、楽器の奏法等を子どもが明確に捉えることができるように意図されていることである。この「提示」を用いることは、子どもが順序性と一貫性を持って楽器を扱ったり、演奏したりすることに効果的である。また、保育者は普段の保育の中で「提示」をする際に、モンテッソーリ教具を丁寧に扱うことを意識的に見せる。このことも、子どもが楽器等を注意深く扱うための一助となっていると言えるだろう。

3 点目は、音を聴くという姿勢を、子どもが自然な形で身に付けることが重視されていることである。そして、それを支える活動が、「静粛の練習」である。この活動を通して、子どもは精神を落ち着かせ、さらに、音を集中して聴く姿勢を身に付ける。このことは、楽器の音や声を聴きながら行う合奏や歌唱において、重要な能力だと言える。また、このように耳を澄ませて音を聴くという経験を重ねているからこそ、環境音に対する気づきが高まると言えるだろう。平成29年に告示された「幼稚園教育要領」における領域「表現」の内容の取り扱いでは、自然の中にある音に対する気づきを高めることが、子どもの豊かな感性を育むという文言が追加された（文部科学省2018, p.28）。先述したような、モンテッソーリ園における音を聴く活動への取り組みは、子どもの音楽的な感性を育むための方法を模索する上でも、1つの手がかりになると思われる。

以上から、調査対象の各々のモンテッソーリ園では、モンテッソーリらが考案した音楽活動を除く、幼稚園独自の音楽活動においても、モンテッソーリ・メソッドの要素が随所に散りばめられていることが明らかとなった。このような背景には、モンテッソーリ教師養成コースでの教育課程を通して、保育者がモンテッソーリ・メソッドの高い専門性を身に付けていることや、モンテッソーリ教師としての経験を積み重ねる中で、子どもへの適切な支援の方法を修得していること等が挙げられるだろう。

本研究では、広島県内のモンテッソーリ園に限定して調査したことから、本研究の妥当性を高めるためには、さらに数多くのモンテッソーリ園を調査する必要がある。また、モンテッソーリ園の現場における、保育者の音楽指導や子どもの音楽活動を質的に見取することも、本研究を継続的に行う上で必要であると思われるため、それらを今後の課題とする。

謝辞

本研究をまとめるうえで、広島県内における9つのモンテッソーリ園の先生方から多くの情報を提供していただきました。先生方に深く感謝いたします。

注

- 1) AMIのトレーナーの養成を務めるアンドリュース(Sarah Werner Andrews)によって実施された、AMI Refresher Courseにおける“Filling The Air With Music!”(2017年2月14日)が挙げられる。
- 2) 本研究の質問紙調査において、モンテッソーリらが音楽教育の主要な教具として位置づけている「音感ベル」は、全体の約8割弱の保育者が保育室に設置していないということが明らかとなった。

参考文献

- ・文部科学省『幼稚園教育要領(平成29年告示)』東山書房, 2018。